

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.116

京町家通信 第116号 2018年1月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページhttp://www.kyomachiya.net/

巻頭言 ◎ 新しい門出に

あけましておめでとうございます。
みなさまにはお健やかに新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。
本年も京都町家再生研究会の活動にご協力を賜りますようお願い致します。

昨年11月12日に新しい条例が京都市議会で可決され、11月16日に公布施行されました。「京都市京町家の保全及び継承に関する条例」です。京町家再生研究会、京町家情報センターでは一昨年からこの条例に関するシンポジウムを開催し、積極的に取組を進めてきました。ようやく町家（戦前の木造）を壊すことへの歯止めが少しかかりそうです。今更遅いというご意見もあるかと思いますが、ようやくここまでできたという思いが私にはあります。これまでなす術も無く壊されていった町家ですが、ここからは少し立ち止まつてもらい、町家をそのまま引き継いでくれる方々にお渡ししようという取組が始まります。これまで通りお住まいの方々には何の問題もなく、やむなく町家を手放さなければならぬ方々への条例です。家を手放すというのは大きな決断、さらに、その家が壊されてしまう。長年住み継いだ愛着のある家が跡形も無くなり、そこに詰まっていた思いも消えてしまいます。そのことを想像すれば、その重さは図ることができないと思っています。まず家を壊さないこと、次に引き継いでもらえる住まい手を探すことが、この条例の大切な役割です。その条例をどのように運用していくのか、関係者の力が試されるでしょう。私たちもその一助となり、積極的に取組に参加するつもりでおります。

京都市役所の町家を担当する部局の部屋にNPOの机が置かれることになるようです。複数のNPOが交代でその机にすわり、市民からの相談を受けることになります。それぞれの活動には得意分野がありますが、手分けして町家の様々な相談に対応していきます。これまで民間と行政の連携は不十分でしたが、これからは隣同士に机を並べ、相談の内容を同時に受け取ることが出来るようになり、対応もそれぞれの得手不得手を考慮して進めることができます。1軒の家が抱える問題は多岐にわたりますが、その問題を解決しようとあちらの窓口、こちらの窓口といろんなところを回ることがありました。これからはこのNPOの窓口に行く

と、すべてについて対応してもらいます。窓口となる私たちもしっかりと勉強をして、その対応にあたりたいと思います。海外に行くと、その地域を担当されている専門家にお会いすることができます。もちろん民間の方ですが、行政から権限を与えられていて、まちづくりや建築に対してきちんとした意見を持ち、指導をされている方々です。もちろん専門家の集まりです。お話を聞くにつけうらやましいと思っておりましたが、京都もいよいよ日本での魁となるのだろうかとわくわくします。週代わりでNPOが担当し、もちろんその為の直通電話もつながるようになります。

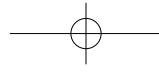
という初夢を見ました。

いつも「連携」という言葉が空回りしているように思っていますが、この夢が実現出来れば本当の意味での「協働・連携」が可能になるでしょう。行政と対等に仕事ができる環境を作っていくことが、町家を健全に再生し、継承していくことになると想っています。その為には私たちの組織の充実も必要になります。これからますます多くの方々の知恵とご協力が必要になります。

私たちのこれから夢実現に向けて、昨年10月28日から京町家の設計塾「京町家の改修設計基礎講座」が始まりました。受講生は20名、熱心なメンバーが集まり、京町家を再生するための基本的なことから学んでいます。年代は様々ですが、仕事や学業を持ちながら、月1回の塾に集うことへの熱気を感じています。単に設計を学ぶのではなく、真摯に町家と向きある姿勢、町家をお持ちの方、お住まいの方の心に添うという役割、美しい町家を作り上げようとする気持ちを伝えていきたいと思っています。

京町家の評価が高まり流通も促進されたが、お住まい、店舗、宿泊施設など使われ方は千差万別。改修もありとあらゆるものが出でました。現代工法を当てはめた家も目立ちます。せっかくの良い町家が台無しと残念に思うこともあります。多くの町家があればそれを選ぶ人たちの目も肥えてくることでしょう。そのためにも良い町家の再生を広く知らしめることが私たちの一番の活動です。この設計塾のメンバーにその夢を託したいと思っています。皆様のご支援をよろしくお願いします。

<小島 富佐江（京町家再生研究会）>



論考 ◎第40回全国町並みゼミ名古屋有松大会に参加して

有松は第一回足助・有松大会開催地であり、町並み保存連盟発足当初の3団体（妻籠、今井、有松）の一つでもある。2016年に重要伝統的建造物群保存地区に指定されたこともあり、今回40周年記念大会の開催地となった（2017年11月17日～19日）。福川裕一理事長はじめ、第一回大会に参加した方々にとってはとりわけ感慨深いものがあったようだ。40周年記念映像の放映もあり、一同でこの40年を振り返ることもできた。第一回のテーマ「町並みはみんなのもの」から「町並みはわたしが守る～みんなのものから40年～」までの変化は、個々人が自覚を持ってこれらの課題に当たらなければならぬという、現状の危機感のあらわれであろう。当時を知らない若い学生を含め、多くの参加者がさまざまな議論を交わした。

開催地の有松山車まつりは、有松天満社秋季大祭、10月第一日曜日に開催され、3つの山車が出る。東町の布袋、中町の唐子、西町の神功皇后、それぞれにからくり人形がある。2日目午前中、有松山車会館で、唐子車の文字書きからくりが披露された。小雨の中、外で披露できないのが残念とおっしゃっていたが、関係者のみなさんの熱い思い、屋台の中の様子なども拝見でき、とても興味深かった。

引き続き参加した午後の第3分科会では「町並みと山車・まつり」をテーマにし、地域コミュニティが議論の中心となった。地域文化の代表でもあるまつりには、歴史的な地域の多くが直面している高齢化や空き家問題と関わり、継承への困難が予想されている。そのような状況下、紹介された各地の取り組みは、とりわけ新奇なものではなくとも、地道な積み重ねが今日の祭の姿になっていることがよくわかった。

有松からは西町の本田さんが有松天満社文嶺講副代表としてパネリストを務められた。どこのまつりでも自分のまちが一番と思いながらお互い敬意を表するようで、中町と東町の代表者にもコメントの機会を割り振る、次代を担う若手の方にも発言の機会を与えられるなど、地域全体でまちとまつりを維持している意気込みが伝わってきた。

飛騨古川の柳さんからはまつりの激しい様子が淡々と語られた。歩道橋撤去の問題で、おこし太鼓が通りやすいようにという配慮があったなど、まつりに伴って町並みが良くなる事例も紹介された。独居世帯が増えているというが、「まつりは続けないといけない」「まつりが地域を支えている」という意識は地域に浸透しており、生活やまちの一

部としてまつりが息づいているようだった。

関宿の服部さんからは「関宿かるた」など、次代の育成に向けていろいろと工夫されていることが語られた。夜の静かなお祭りで、風情がある、いいなあという思いを養つていかないと、お祭り騒ぎになってしまうという危機感も語られた。まつりの本質をどのように伝えていくのか、という課題が見えてきた。

コーディネーターの浅野先生が紹介された上野天神祭巡行路の高層マンション建設問題については考えさせられた。中層建築物の建て替えについて訴訟がおき、町並みとまつりが優先された。それでも残念な町並みになったという。

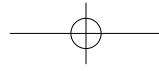
もっと残念なことに京都ではもはや祭が映るように建物の高さを考えようという気持ちが見られない。根底にあるはずの町会所でさえ、機能を優先して建て替えられる。派手な商売をしたり、セットバックにバリケードを設けたり、「祭のため」の意識が薄れているように感じられる。だが、明倫学区まちづくり委員会で取り組んでいるように祇園祭にふさわしい風格のあるまちをめざしてがんばっている住民もいる。統一した提灯建てを復活した町もある。失われてしまった町並みをもう一度取り戻そう、作っていこうと取り組んでいる人たちがたくさんいるのは明るい兆しがある、まつりがあるからできることなのだ。

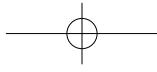
まつりだけでも、町並みだけでも、「保存」するだけでも意味がない。コメンテーターの大森先生がおっしゃったようにまつりを核にした町並み保全が可能であるとともに関わる人々を旧町内などに限定することもない。

ただし、次代に引き継ぐ教育などのシステムが必要である。近世の趣を踏襲しつつ、現代に生きている祭を古色蒼然と執り行うことが重要なのではなく、次代に引き継ぐために大切なこと、気持ちや精神を共有しながら毎年おこない続けることこそ、まちとまつりが一体となった保全継承につながると思われる。

午前の見学会では、雨の中、有松のみなさんがとても丁寧に案内してくださった。有松絞りを学ぼうとする若い人達や技術力のある方の姿に生業あってこそその「まち」であることを痛感する。お茶席でのおもてなしもこころあたたまるものだった。邸宅を守りつつ新たな試みを始めている方が、「ここに生まれたものの使命だから」と明るくおっしゃった一言が印象的だった。有松文嶺講のみなさんも、当日の運営はもちろん、日々ボランティアでいろいろな仕事にたずさわっておられる。まちやまちなみをつくり、まつりを担っていくのは、こういう人々の気持ちと地味な努力の集積なのだ。「わたし」にできることは限られているが、未来に向けて望ましい考え方、まちや祭の精神を伝えにくいために「わたし」にしかできない役割をそれぞれの立場で果たしていかなければならないと痛感した3日間であった。

<丹羽 結花（京町家再生研究会）>





再生の試み ◎ 熟年夫婦の居住実験－退職後の暮らしに京の町家を選ぶ

始まりは、一本の電話に遡る。「網野さん、次の調査は京都の町家をテーマにやりませんか。」「分かりました。企画を考えます。」こうして始まった調査は京町家の保全・再生の取組をトレースする2年間の調査となった。そして、私自身が、京町家について多くの知見や知り合いを得ることにもつながった。1年目の報告書のあとがきに、京町家に関して驚いたことの一つとして、「居住者へのインタビュー記事を見ると、暑い、寒い、不便、小動物・虫が出るなどのマイナス要素にかかわらず、京町家の魅力を評価し、居住する人たちが確実に存在することが分かる。」と記している。そしてこの驚きの感覚が、尾を引くことになった。長い間、まちとすまいの仕事に関わってきた自分の好奇心に火をつけたともいえる。町家を残すことの意味も私なりに理解できだし、そのためには理解のある新しい扱い手が求められていることも分かった。

折しも2回目の退職を控えて、次なる生活設計を考える時期であった。思えば多くの伏線や要因が一つの方向を示していく、定年退職を機会に京都に引っ越して町家に住むことにしてよう決心することにつながった。内心、自ら居住実験を始める気分でもあった。

妻の賛同も得て町家に引っ越すと決めてからは、精力的に家探しを行った。仕事から退いたら速やかに住まいも引き払うことにしてようと思っていた。ネットで検索し、土日祝の休日に京都に出かけて、現地を訪れる。内覧するのは売家のオープンハウスの時のみ、あとは立地と外観の確認。情報センターにも入会した。「住みたい町家を探しに行こう」にも夫婦で参加した。とにかくたくさん見て回った。

そして、この家に出会った。北野商店街から数軒分外れたところにある2軒長屋の一軒を改修したもので、オープンハウスで中を見た時の印象はかなり良かった。一階は、4畳半の和室を雪見障子で仕切って、あとは間仕切りのない大空間のLDK。火袋にあたるところに吹き抜け。織屋建ての形式でリビングにも吹き抜けがある。内装のセンスも悪くな

い。ただし価格は予算を15%オーバー。他にも、長屋であること、車は行き止まりの路地であること、建物の南側がこの路地に面していることなど気になるところがあった。妻は、この家が、いつも初詣に訪れている北野の天神さんほど近いこと、平安京の大内裏跡にあたることやオープンハウスで見た古建具の存在感などにいたく心を擰まれた様子であった。その夜は慎重派の夫とこれに決めたい妻との攻防となつた。
・・・引越しが決まり、妻が丹精を込めて育てたバラを里親たちに届けた。凡そ三分の一のバラが京都まで旅をして町家の庭に収まることになった。

この庭に関しては、もう一つ話がある。慎重派の私が気にしたことの一つに南側が路地に面していることがあったが、それは洗濯物干しの日当たりのことでもあった。前の家は、広い空の真只中にあるような所で洗濯物がよく乾いた。雨天でもサンルームのようなキッチンが格好の物干場であった。この家の南側は路地に面していて、2階の花台も洗濯物を干せる状況ではない。目の前には向かいの家の窓がある。北側の庭の一角に樹脂製の屋根付きの物干場があるが、何しろ陽が当たるか否かおぼつかない。引越しは10月末。だんだん太陽高度が下がつていって日当たりは寂しい限りであった。さすがにシンドイなと思っていた。しかし、春、夏と進むにつれてこの空間は素敵な物干場に変身した。陽の射さない物干場を見ながらも、夏のポリカ屋根の下の温室のような空間を思い浮かべることができる。うれしい誤算であった。

ところで、2年間空き家であったお隣が、最近、売りに出された。また新しい扱い手を迎えることになり、お付き合いも始まるだろう。町家のことだけではなく釘抜地蔵さんのふるまい汁粉、ゑんま堂狂言、町内の地蔵盆など地域の催しとの出会いもある。

こうして熟年夫婦が始めた京の町家での居住実験は今も続いている。

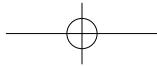
<網野 正觀（京町家再生研究会）>



外観-ある雪の日



鉢植えのバラと物干場



改修事例 ● 京町家のオフィス –らくたび京町家

千年の都「京都」の歴史文化の魅力を伝えるために創業した 2006 年から、いつかは京町家にオフィスを構えて京都の情報を発信したい！と思い続けていた中で、2010 年 6 月、初めてオフィスを京町家に移して四条京町家の活動が始まりました。しかし、こちらの京町家が 2014 年 12 月で使用が難しくなり、オフィスの引っ越しを行わないといけない状況となりました。できれば移転先の次のオフィスも京町家であれば…とは思いながらも、タイミング良くオフィスとなる京町家と出会う機会はなかなか無いかもしれません…と半ば諦めながらも、新しい京町家との出会いを求めて京町家情報センターに登録しました。

さて、京町家情報センターから届く京町家の情報誌を見ている中で、ある物件に興味を持って問い合わせたところ、それとは別の物件でしたが、素敵な京町家がまもなく空きそうですよ、と教えていただきました。その京町家こそ現在、本社としている旧村西家住宅（らくたび京町家 / 中京区蛸薬師通高倉西入泉正寺町）であり、運命の糸に導かれたかのように、オーナー様とは以前より弊社の京都学講座や現地散策ツアーにご参加をいただいていたことから既にご縁があり、仲介をいただいた不動産会社の社長様も以前に京都の地名に関する講演を聞いていたりご縁があり、偶然どちらにもご縁があったという、奇跡のようなご縁によって現在の京町家を本社とすることになりました。

現在、らくたび京町家は、スタッフ一同のオフィスでもあり、また大座敷や茶室などは茶会やイベントの会場として大いに活用しています。例えば、毎月開催している茶会は、あまり作法を気にすることなく、とにかく京町家のしつらえを見て、おいしい和菓子をいただきて、ゆるりと季節を感じていただきたいという想いから「四季ゆるり茶会」と名付けて開催しています。今夏の猛暑の日に開催した「名水ゆるり茶会」では、京都が誇る歴史的な名水を各地から汲んできて、名水の歴史ミニ講座で学んだ上で名水を飲み比べて、その名水でお茶を点てました。また、旅行会社と提携して修学旅行向けのプログラムのひとつとして茶道体験も行っており、風情あふれる京町家の空間で抹茶

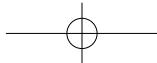
と和菓子をいただくのみならず、各生徒の皆さん全員に茶碗と茶筌を準備して、茶道の先生のわかりやすい指導を受けて、自ら茶人としてお茶を点てるという体験も実施しています。

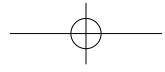
また、京町家では様々な年中行事も執り行い、3 月の上巳の節句には“雛飾り”を、5 月の端午の節句には玄関屋根から邪気を祓う菖蒲を垂らす“軒菖蒲”などを毎年行い、京都が大好きな人びとが集う弊社の会員組織（らくたび会員）の皆さんと一緒に豊かな季節の移ろいを楽しんでいます。その他にも、京町家イベントとして毎年、夏には流しそうめん、迎春準備で賑わう師走にはお餅つきを行い、また中秋の名月には観月の宴を催して月見酒をいただくイベントを開催したり、ある時は出張回転寿司をお願いして京町家の大座敷に組み立てた回転寿司レーンが突如現れ、寿司職人がぎった絶品の寿司がクルクルと座敷上を回るという大人気イベントなども開催するなど、いつも京町家の空間には賑わいが絶えません。

弊社では 2017 年 4 月より、もう 1 軒、洛北紫野の禅寺・大徳寺の北東に位置する旧荒川家住宅（らくたび京町家紫野別邸 / 北区紫竹西高繩町）の活用も開始させていただきました。こちらも京町家居住支援者会議の皆さんからご紹介をいただきまして、黒タイルが輝くおくどさんにはじめられをして、良いご縁となりました。2018 年 1 月より、らくたび京町家紫野別邸を事業所として本格稼働するとともに、おくどさんを活用した食文化の継承などにも尽力していきたいと考えています。

京町家は建物そのものを維持保存することも大切ですが、京町家という空間で受け継がれてきた食文化や年中行事など京都の暮らし（生活文化）も同時に、同空間に受け継がれていくことが大切と考え、今後は年々、近代化・国際化する暮らしの中で、京都が誇る生活文化を受け継ぐことがより重要になってくると思っています。

<若村 亮（らくたび代表取締役）>





報告 ◎ 11月例会 紫野散策



らくたび京町家 外観



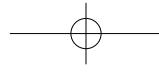
らくたび京町家紫野別邸 外観

日時 平成29年11月9日(木) 午後1時から4時

参加者 8名

今宮神社に集合し、参拝後、境内を散策。門前のあぶり餅をおみやげにして、大徳寺に移動、「らくたび京町家・紫野別邸」まで、らくたびガイドさんの説明を聞きながら歩きました。紫野別邸を見学後、歓談。のんびりとした秋の一日を楽しみました。





改修事例 ● 「あけびわ路地」6軒目の改修

下京区

設計：アトリエRYO+内田康博／施工：株式会社大下工務店

○経緯

これまで当通信で逐次報告させていただいている下京区の長屋「あけびわ路地」に連なる6軒目の改修の事例報告である。はじめの5軒は2016年3月から7月にかけて順次工事が完了したが、その後、約半年の準備期間をおいて12月下旬に工事に取り掛かった。現場調査及び設計の作業は他の5軒と同時に進めてきたが、6軒目は大家さん御家族で使うことを検討していたこともあり、着工は保留していた。

○特徴

6軒目は他の5軒と隣接しているが敷地も床面積も一回り大きく、構造上も独立して建っている。昭和16年8月の棟札から最も後に建てられたことがわかる。塀に囲まれた前庭と2階の玄関をもつのが大きな特徴で、2階の階高が高く、2階の壁が60cm程他より前に出ていることもあり、別格の存在感のある外観をもつ。

前庭は南面に木戸門を設け、北に玄関入口、東にはトオリニワに続く勝手口を配す。2階の玄関の北側に1階ほどの庭を持ち、東側に4畳半のダイドコと6畳の座敷が並ぶ。ダイドコと座敷の南側に1間弱の幅のトオリニワが配され、東の裏庭に続く。座敷の奥には縁側続きにトイレがあり、風呂はない。以前の住まい手がトオリニワに低く床を張り、片隅に1畳大のユニットバスを設置していた。

ダイドコ北側の階段から2階に上がると6畳間が2つ並び、どちらも長手に幅一杯の窓をもつためとても明るく、風通しがよい。

○改修のポイント

この建物は一群の長屋の中でも最も傷みの目立つ建物であった。屋根の棟中央部が下がって雨漏りし、2階の床の畳は湿って腐朽していたため、本格的に改修するまでブルーシートで養生していた。また、北側隣地からの雨水による柱の腐朽、及び床の沈下が著しかった。

その他、外壁には他の棟にはないモルタルが塗られ、軒裏もモルタル塗りで隠されており、湿気が逃げにくいために木部の蟻害、腐朽の可能性が懸念された。

間取りは当初の間取りを踏襲して変更は最小限とし、ユニットバスを一回り大きなものに入れ替え、キッチンとの間に洗面脱衣室を新設するにとどめた。

工事を始め、北側側壁を隠していた合板を撤去すると階段部分外壁の土壁がほとんど落ちていただけでなく、柱も大きく傷んでいたため、この部分の柱と桁を入れ替え、土壁を木舞下地から復旧した。また、座敷の北側外壁は柱の足元が腐朽して大きく沈下していたため、一度1階の床を撤去し、地面からポストを建て、2階床を介して2階の床柱を突き上げるなどの工夫をして水平に戻した。側柱の下にはカズラ石を据え直し、根継ぎを施し、土壁を塗り直した。

北側隣家の蔵の樋や外壁が傷んでいたため隣の方にも現況を確認いただき、この機会にこちら側から補修いただくこととした。

また、隣家の給水管からこちら側への漏水がみつかり、元栓を締めるなど対応いただいた。

瓦を葺き直し、外壁のモルタルを撤去して大津壁を復元し、木部は弁柄塗装とし、塀は焼杉板で仕上げ、木戸門の瓦を据え直すと長屋の北端に一段と高く屋根を上げる姿が美しく甦った。

今年（2017年）の10月末、通りを挟んだ西側の8軒の長屋群が全て空き家となり、現況を把握するために早速、調査に着手したところである。現状を確かめつつ、住まいや店舗としての活用の方策を探り、新たに使っていただける方を探すなど、新たなプロジェクトを進めることになる。

<内田 康博（京町家作事組）>



改修後の西側の外観(左側)



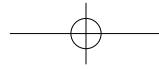
改修中 側壁の木舞下地



改修前 2階座敷



改修後 2階座敷



町家再生再訪 その10 ● 「大井邸」

京町家情報センターの前の代表でいらっしゃる大井市郎さんから、2017年9月に六角醒ヶ井の借家の土間の補修と防蟻処理についてご相談いただいたのを機に、借家のはす向かいにあるご自宅を訪ねました。大井さんは1930年生まれの87歳で、旧制京五中から京都工業専門学校（現・京都工芸総合大学）を経て、工務店で1年半ほど木造の仕事を経験した後、建設省に入省され、大阪の近畿地方建設局に在職中、一級建築士の資格を取得し、技官として勤務、52歳で早期退職したあと、労働省の雇用促進事業団に定年まで勤めたあと、建築設計事務所勤務、民事調停委員を経て、旧総合資料館（現・京都学・歴彩館）等で古文書読解を学び、『越後突抜町文政・天保 町議録』を編纂されたというご経歴の持ち主です。

今回は作事組の改修事例というよりも、大井さんに取材をさせていただきました。

○大井家の暮らしと町家に対する思い

祖父は宇治のお百姓の家、或いは庄屋の家に生まれて、曾祖父、祖父と二代続けて大井家に養子に迎えられ、祖父の代まで醒ヶ井六角のこの家で米屋をしていました。私は生まれたときからずっとこの町家で暮らしてきましたが、家が米屋だったとき、表にはミセの土間に米つき場と売り場と帳場があり、帳場は畳の間と連なり、土間は通り庭としてずっと奥まで続いていました。奥には風を遮る建具もなく、お袋の手はいつもあかぎれで可哀そうやつたから、いずれ結婚したら通り庭の土間は温かくしようと思っていました。昭和34年に結婚して、そのときに通り庭に床を張り、おくどさんを潰して新しい流し台を据えました。そのとき火の元はガスになりましたが、それまでは焚き木と藁を使っていました。米屋をやっていたからか、藁が沢山あってお米は藁で炊いていました。当時は煮炊きの湯気と煙を上に逃がす大きな火袋と煙突があり、立派な準棟幕が屋根を支えていました。その後、新しい台所をつくるときに件の小屋組も取り扱ってしまいました。二階にも床をはりましたが、よかったです。

私が建築の仕事をはじめたころ、1950年代半ばになるとニュータウンが作られ、最大効率の設計が追及されてきました。明るくて温かくて効率のよい建物、それに引き替え、我が町家は暗くて寒くて効率が悪い。何とかしよう。建築には色々な考え方がある。借家の改修は作事組にお願いしたけど、この家は自分の考えで改修しました。しかし実際は右往左往しました。外観は変えんとこうと妻も言っていましたので、二階は水仕舞が心配で虫籠窓から引違のガラス戸にしましたが、表格子はそのままの外観を残しています。

妻は北大路の小山上内河原町で育ちました。育った家は町家ではなく郊外型の住宅と思っていました。結婚をしてこの古い大井の家に住んだわけですが、あまり抵抗もないらしく暮らしていました。亡くなる少し前「大井の家が好きやつた」と言っていました。何のことかよく解らなかったのですが、或る日、妻の育った家の平面図を書いてくれる人が居り、それを見るとそれはまさに「町家」でした。これで「大井の家が好きやつた」の意味が解ったと思いました。郷愁でした。

○地域について

子供の頃は楽しい遊びが色々ありました。紙芝居や空也堂の六斎での狂言「土蜘蛛」が面白かったし、餅なげのお餅をもらったり、鯛焼きならぬ亀焼きを買って食べたりして。妻のお家では、外でお菓子を買って食べるなんて信じられないことでした。そんなことはお行儀が悪いからと厳しく躾けられて育ったようです。

家の付近一帯が小堀遠州屋敷跡で、はじめは妻と私の共同製作の駒札を表の軒下に掲げていました。それから後に小堀遠州顕彰会の方から、いまの案内板を掲示させてほしいと申し入れがあり、そちらを掲示しています。

○借家について

斜向かいの借家はこの家とほぼ同じ造りです。もとは父の妹とお婿さん、つまり私の叔父さん叔母さんにあたる人が、そこで米屋を開き、暮らしていました。子供がなくて養女さんをもらわはったんですが、養女さんも早くに亡くなってしましました。私がもっと親しく付き合っていたらよかったと今頃、くやんでいます。相続の段になってどこに居られるかも知れない養女さんの実のお母さんが正規の相続人と解りました。それはおかしい、なんとかならないかと思い、司法書士さんに相談して生前贈与してもらう方向で動き出しました。実のお母さんがどこにいはるのか探し出して、話し合いの末にいくらかお支払して息子の所有となりました。

2003年に作事組に頼んで改修し、竣工後6～7年は「子どもと川とまちのフォーラム」事務局長の小丸さんが入居し、環境学者で政治家の嘉田由紀子さんらが出入りしていました。いまは変わって、大学の先生がご家族と住んでおられます。いい人が住んでくれているのでよかったです。

＊＊＊

帰り際に遠州煎餅（湿っていても美味（笑））と珈琲をご馳走になり、それからお庭に案内していただきました。井戸のあったところに亀2匹。もう冬眠の季節、枯葉を上にたっぷり被せてやるんですけど仰って、愛妻家でやさしく穏やかな人柄が伝わってきました。

2003年借家の改修については「空き町家をまちづくりの拠点に…中京・O邸」をご参照ください。

<http://kyomachiya.net/sakuji/kaisyu/07.html>

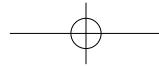
（取材・構成：京町家作事組事務局 森珠恵）

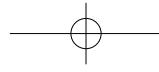


大井邸



大井さんとお地蔵様





interview ——京町家に移り住んで◎ 小山O邸

聞き手：エステート信 井上信行

●なぜ京町家へお住まいになりたかったのですか？

京都の景色や京都の文化、建物、昔から伝統を受け継いできているものがとても好きですごく感銘、感動することが多く、それを今に生かし、残していくかなければならないことととても思います。

京町家の建て方も今はない昔の人の知恵や技術で建てられており、それは決してなくしてはならないもので残していくしかないといけないものだと思います。

京町家に住むことで少しでもそのことに自分も貢献できればと思ったからかなと思います。

●実際暮らしてみてどうですか？

京都で暮らす前には広島県の福山に住んでいて気候も温暖で家も昔ながらの家ではありませんでした。

一番嬉しく思うのは来てくださった方々に「懐かしい感じがして気持ちいい」と言ってくださっていただけます。町家だからと思いますし、やはり日本には残さないといけない建物だと思います。

ただ一番びっくりしたことはネズミとイタチです。

「いると思ったほうがいい」とは聞いていたのですが、屋根か屋根裏をドタバタ走り回る音にたびたび驚きどきどきします。実際ネズミをみてしまったときはどうしようとすごく悩んでしまいました。でもそれもついてくるものなんだろうなと思って覚悟しないといけないことなんだろうなとあきらめ感じています。

あと冬の寒さがきつく感じ身にこたえます。温暖な気候の地域に住んでいたのでよけいに思ってしまうのかもしれません。でも町家ならではのことを感じています。ただ、身体が冷えないように気を付けないといけないなと思っています。

●ご近所付き合いとかどんなもんですか？

もともと京都の人間ではないので、周りの方からいろいろ京都の方の気質をお聞きしていたので少し不安はありましたが、地域的なこともあるのか、みなさん暖かい人ばかりで、とくに感じるのは広島のほうに住んでいたときはお盆

あの地蔵盆のお祭りではなく、京都は地区、地域ごとにそれぞれの形であるんだなあということにまた感銘し、それに参加させていただくことがとても有り難くうれしく思います。



●事務局覚え書き

3月8日を「町家の日」と記念日協会にて全国的に制定させていただきました。それに合わせて今回2回目となる「3月8日は町家の日」イベントを3月3日～11日を町家ウィークとして企画しているところでございます。町家にお住いのところ、ご商売をされているところ、様々な町家関係の方々にご協力いただき、マルシェやワークショップ、音楽ライブなどを開催いただきます。この3月8日には、全国各地の町家で色んなイベントが行われているという自由で楽しい日になることをを目指し、それを通じて町家への関心、保全再生の気持ちに繋がればと思っています。詳細が決まって参りましたら、HP等でお知らせさせていただきます。是非ご参加、ご来場ください！

<京町家情報センター事務局 城幸央>

オーナー登録数：延229

ユーザー登録数：延1695

物件登録数：延1730

成約件数：延217 (2017年12月1日現在)

